

## まえがき

——国際関係を日常性で考える——

私の手元に、2枚のDVDがある。1枚は、英国のBBCが作成したドキュメンタリー風のノン・フィクション『世界に衝撃を与えた日 (Days that shocked the world)』(2002年)である。これは、1945 (昭和20)年8月6日の広島への原爆投下について、投下した側の米国B29爆撃機「エノラ・ゲイ」の乗組員の、テニアン島からの出撃前から原爆投下までの時々刻々の様子と、恐怖の時間が迫っているにもかかわらず、そのことをつゆ知らずに、日常的生活を続けていた広島の母子、女学生、カメラマンの、前日からその瞬間までの様子を交互に描き、最後に8時15分に、広島の人たちの日常生活が、予想もできない事件によって、一瞬の間に壊滅してしまったことを描いている。

もう1枚は、福岡市に拠点をおくNGOベシャワール会が作成したもので、ドキュメンタリーの『アフガンに命の水を一ベシャワール会26年目の闘い』(2009年)である。これは、戦乱と干魃のアフガニスタンに、2003年3月から、6年の歳月をかけて、全長25.5kmの用水路を拓き、3000ヘクタールの田畑を甦らせた、ベシャワール会の医師中村哲と数十人の日本人青年たち、および共に働いた延べ60万人のアフガン人の記録である。ここでは、戦乱と干魃という非日常が日常化してしまったアフガニスタンで、人々が食糧を自給するという、人間にとって最も基本となる日常性を復活させようとしている(本書の第12章参照)。

一般的に言って、国際関係は、国家と国家の関係、国境を越える人と人の関係、および諸国家で構成する国際組織の3つのレベルからなっている。人の日常性を問うということは、人と人の関係に強く関連するように思える。しかし、それが意味をもつのは、むしろ国家間の国際関係に関連してのことである。それは、国家間関係を人間の視点で見直そうとするものである。

日常性と国際関係の関係について言えば、2つの意味がある。1つは、国際関係のなかの人々の日常生活であり、もう1つは、日常的に繰り返される国際関係という意味である。本書の問題意識からすれば、重視するのは、人間の視点に通じる人々の日常性である。日常性としての国際関係が、国際関係のなかで人々の日常性を破壊することに対して、人々の日常性を重視することで、国際関係の新しい見方が提示できるかもしれない。本書では、この可能性を追究してみたい。

国際関係での人々の日常性の有り様は、人々の生存、生活、安全、人権などの問題として現れる。本書の記述では、最初に日常性の概念規定をし、そのあとは安全、人権、人の国際移動、戦争・平和の順に、全体を5部に分けて、議論を展開していく。ここで、各章について、著者なりの意義づけをしておきたい。

「Ⅰ 日常性で考える」の第1章「日常性と国際関係」では、国際関係論のなかに「日常性」という概念を導入することの学問的意義を明らかにする。

「Ⅱ 安全で考える」では、全体として、1990年代以降の「人間の安全保障」論が「人々の安全」を高めるための条件を考察する。第2章「人間の安全保障」論と人々の安全」は、「人間の安全保障」論によって、「人々の安全」が保障される条件を検討する。第3章「国家の安全と国民の安全」は、国家から議論し始める安全保障論と、個人の安全から議論し始める安全保障論について、両者の関係は原理的に確定できないために、現実の政治では感情的議論が支配的になることを明らかにする。第4章「『子どもの安全保障』の国際関係論」は、国際関係のなかで、社会的弱者である子どもの安全保障を考える。

「Ⅲ 人権で考える」では、全体を通じて、誰が人権の対象となるのか、また強調されるのは人権のうち、自由権なのか、それとも社会権なのか、について、国際的・国内的歴史状況との関連をみていく。第5章「ヘルシンキ宣言とバンコック宣言—人権についての国際的合意（1990年代）」は、当時までの東西対立の軸、南北対立の軸と、さらに政府対 NGO の対立軸を通じて、国際的合意の位相を明らかにする。第6章「人権の内と外—国際政治のなかで」は、国際政

治での人権問題の語り口 (discourse) について、誰のどこまでが人権保障の対象なのかに注目して、分析的に提示する。第7章「人権と国際結婚」は、国際結婚から生じる日常的問題が、文化摩擦なのか、人権問題なのかを考察する。

「Ⅳ 移動で考える」では、人の国際移動について、人権の視点から考える。第8章「国境と人権—人の国際移動」は、前半で人の国際移動の一般論を展開し、後半で人の移動と人権保障の関連を考察する。次の2章は、現代日本に焦点を移す。第9章「日本の国際化と多文化主義—『内なる国際化』の視点から」は、1980～90年代の日本の国際化への対応で重要な問題点を提示する。第10章「日本の入管政策—グローバル化への対応」は、2000年代において、グローバル化への日本の特徴的対応を解明する。

「Ⅴ 戦争と平和で考える」の視点は、戦争の問題を人々の日常性の回復という視点から考え直すことにある。第11章「最近の戦争は本当に新しいか」は、1990年代以降のハイテク兵器や内戦の戦争が、その形態、原因などからみて、どこまで新しい戦争なのかを考察する。第12章「中村哲とベシヤワール会—NGO 活動とその思想」は、アフガニスタンでの NGO の農村再生支援活動について、それが、米国の対テロ戦争と思想的に対立するものであることを明らかにする。第13章「個人史のなかの『戦争と平和』」は、著者の個人的経験をもとに、国際関係論に対するその思想形成の歴史的背景を説明するものである。この章は、本書の導入部におく方が適当なものかもしれない。

最後に、本書は、著者が1996～2010年に発表した論文を集成したものである。このうち、1990年代後半に発表した論文では、データが時代遅れになっているが、初出の論文の理論的枠組みと論述の時代的意味は、そのまま残すことにし、新しいデータを付記の形で補充しておくことにした。この点は、読者の方々に、お許しいただきたい。